同和問題を考えるうえに

明治から昭和の初めにかけては、特に部落差別のきびしい時代でした。その時代に生まれ育った同和地区の人たちのなかには、勉強したくても経済的あるいは家庭の事情などに加え、いわれない部落差別によって小学校へ満足に通学することができず、ただ在籍し、なかには座る机もないまま〝トコロテン式〟に卒業した人たちもいます。

読み書きが全然できない人たちのため、昭和四十二年に野中地区、四十八年に前浜地区へ、それぞれ『識字学級』が開設され、六十歳から八十数歳というお年寄りの方方が、文字を知る勉強をし、生きるよろこびを味わっています。その学級生の一人、山川さんが長岡小学校の子供たちにお話された山川さんの生きざまをまとめたものが「わたしのおいたち」です。

この手記は、その後長岡小学校で、同和問題の生きた教材として利用されているものです。

同和問題を考えるうえにも、ぜひ市民の方々に一読願い、部落問題を正しく理解していただきたいと思います。

【社会教育課】

わたしのおいたち

山川照井

わたしは、今年七十九歳になります。今から、さかのぼって数えてみると、わたしはちょうど一九〇〇年に生まれたことになります。

ふりかえってみると、ずいぶん長生きをしたものだと、思います。その間には、今思い出しても、なみだがあふれてくるようなくやしいことや、つらいこともありました。その反対に、おさない小学生の時に受けた、友だちのやさしい心を、いつまでも忘れられなくて、七十年のむかしに別れたその方に、一目会ってお礼を言いたい、そんななつかしい思い出もあります。

わたしの家は、貧しかった。父も母も家の者みんなが、朝早くから夜おそくまで、いっしょうけんめい働いていました。でも、わたしたちのくらしは、ちっとも楽になりませんでした。

わたしも子どもなりに、両親の手伝いや、子もりなどもしました。だから学校も休みました。休みたくて休んだのではありません。家が貧しいのと、弟や妹の子もりをしなくてはならなかったのです。そんな時は、どれほど学校へ行って、みんなといっしょに遊んだり勉強したりしたかったでしょう。

わたしは、一日、弟をつれて学校へ行きました。弟は、喜んで、教室中を走り回り、みんなから、勉強のじゃまだときらわれ、いやがられました。もちろん、わたしのせっかくの計画は、だめになり、それからは、一度も弟をつれて学校へは行かず、ずっと学校を休んで子もりをするようになりました。

貧しいくらしの中なので、毎日入浴ができず、わたしのからだも衣服もよごれ、あせくさかったのでしょう。男子から「クサイ」と鼻をつまみ、いやがらせをされ、わたしのかみにはシラミはいなかったのに友だちは、「シラミがうつって、かゆい。」と、わたしに向かって、かみをかいて、いやがらせをしました。

まりつきやなわとび、オニごっこ、じんとりなどもなかなか仲間に入れてもらえませんでした。やっと仲間に入れてもらうと、どうしたことか、みんな遊びをやめて、ほかの場所へ移ってしまいました。

それにそのころは、今とちがってお茶は、タゴに入れ、飲みたい人は、竹のひしゃくで自由にべんとう箱にお茶を入れて、飲んだものです。ところが、部落の子が、先にお茶をくんだタゴからは、部落出身でない子ども達は決してくみませんでした。そうして、部落でない子どもがお茶をくんでいるタゴの方は、長い列ができていたことを、今でもはっきりおぼえています。

また、こんなこともありました。そのころは、机もこしかけも二人がけでした。その机やこしかけの中ほどに線を引かれ、少しでも手や本が境をこえると、だまって押しのけられたり、いじわるを言われたりしました。あの小さい机やこしかけのことですから、これらのことは、毎日のことでした。

今になって考えると、これらの苦しみを受けたのはわたしだけでなく、部落の子どもたちみんなそうだったと思います。

それに、よめいりして、初めて買ってもらった時計の針の見方がわからなくて、困ったこと。字が読めなくて、ひとりで大阪へ行けず、だれかに連れて行ってもらうよりほかになく、ほんとうに悲しい思いをしたこと。次から次へと、字を知らなくて困ったことやつらかったことが、思い出されます。

でも、今では、市役所のいろいろな係の名を書いたふだが読めだし、人に問わなくてすむようになり、バスや電車の行き先が読め、大阪へもひとりで行けます。

日記をつけ、孫に本を読んでやり、大阪にいる息子に手紙が書けるようになりました。ほんとうに、町の灯が明るく、夕日が美しく見える。字を知ることが、こんなにすばらしいものとは、思いませんでした。

月曜日と金曜日、週たった二回の識字学級が、なんと待ちどおしいことでしょう。文字をおぼえること、本が読め、日記が書けることが、なんとすばらしいことでしょう。七十九歳のわたしでですが、ほんとうに生きていてよかったと思います。

七十年のあいだ、わたしを暗い、冷たいきりの中にとじこめていたものはなんでしょうか。たった一回きりの一生から、すばらしい生きがいをうばったものはなんでしょうか。わたしは、識字学級へ通いながら、わたしのなかまといっしょに、今それを知りました。

不可侵（入を侵してはならない）不可被侵（また、侵されてもならない）

これは、部落解放の父、松本治一郎先生の言葉です。

身体障害者慰安 地曳網会に参加して

四月二十九日の天皇誕生日、快晴南風の好天に恵まれて、市招待の集いは本当に楽しく有難いものでした。

漁師さんは、波を見よって巧みに舟を潮に乗せる。舟はたちまち白波をけ立てて沖合はるかにつき進む。櫓（ろ）を押す労苦は昔話になった。タバコを一服して見守るうちに、はや舟は網をおいて帰ってくる。

私たちがテントの下で方々のお話を聞いているうちに、間もなく荒手が上り出す。皆一勢に波打ちぎわに出て思い思いに手をかける。袋のまわりは黒山の人だかり、今は〝コイラ〟もしゅんである。それを肴にいただく一ぱいは身にしみわたる。太陽は輝き汐風はそよぐ、寄せては返す黒潮は太古のままのものでしょう。

しかし、我々如き身障者を慰さめ、はげましてくれる今日の福祉国家、福祉行政は、またなんとゆう進歩した思想文化の有難い世の中でありましょう。つくづく人智の向上、歴史の進展に感激します。

当局ならびに有志の方々のご尽力に感謝すると同時に、身体の不自由は精神でカバー出来る豊かな心を心がけて、明るく元気に生きぬかねばと誓いました。

おみやげの〝イリコ〟は帰って早速屋根に干し、夕方には近所へもくばりました。

人間は社会的動物であります。しこうして、共存共立、折角の市の催しを理解して、次会は一層多数の皆々が参加して、更に盛大な会合とし、集いの意義を味わいましょう。

森国敬治（里改田）

南国意外史〈5〉

庁舎〝新館〟、落成直後に雨もり

南国市が誕生して間もなくのこと――。現在の市立図書館の建物は、かつては南国市役所の〝新館〟であった。それというのは、当時の庁舎が「土佐長岡郡地方事務所」の木造平屋あわせて四棟ほどの古びきったもので、当時市内ではこんなものは見ることができない〝古代建造物〟であったため、新館は実にスマートであった。

新館建築は請負業者が決まりにくかったが、結局、大阪府下のDハウス工業に決定。建物形式は、「鋼管構造」という、それまで聞いたことがないもの。普通、洋風建築に登場する鉄骨（筋）を使わず、鋼のパイプを骨格にする軽量なもので、実際はご覧のとおり。

あれは九月であったか。落成式後七日目ごろ、二階が議場であったから市議会か関連の会議であったと思う。その会議の最中に猛烈なにわか雨。これがたまるか……といった人も。

そのうちに天井の東のやや北寄りからポトリと雨。やがて落ちる場所と回数と量がふえ、床にはところどころ水だまり。会議どころではなく、バケツだ、なんだ、とかき集めに大わらわ。当時の小使室にあった大タライも登場した。

原因は意識的な手抜きではなく、施工したDハウスが屋上に張ったコンクリートとコンクリートの間を埋める充てん材の使い方がよくなかったと責任補修したが、落成直後の近代建築物の雨もりは常識では想像できない異色篇であった。

三谷勇喜（大埇）

昭和36年8月、新館落成

第七回南国市民囲碁大会

五月四日、五日の両日、『第七回市民囲碁大会』が後免東町の南国囲碁クラブで開かれ、約百名の参加者が三クラスに分かれて熱戦を展開しました。

なかでも、二日目の有段者の部には四十数名が参加。各棋士の棋力の向上が目ざましく、各局ごとに激戦が続き、時間の都合上〝秒読み〟となる対局も数多くみられました。

結果は次のとおり。

■A級（有段者）
①小野殊仙（後免町）②三好武光（ミロク）③土居栄城（稲吉）④浜田開造（野市町）⑤楠瀬幸生（野市町）⑥岡秀雄（稲吉）

■B級（一～四級）
①吉岡秀文（長岡）②岩村重寿（岩村）③山崎正男（久礼田）④中屋誠（後免町）⑤水吉晃（大埇）⑥山崎峻英（長岡）

■C級（五級以下）
①南場計佐清（土佐山田町）②竹内裕雄（土佐山田町）③竹島寅彦（前浜）④松木宣隆（大埇）